

人との出会い

昆虫採集少年

私は、昆虫採集少年でした。高校でも昆虫採集まっしぐらでした。高校2年の修学旅行で、東京お茶の水駅近くの旺文社学生会館に泊まったところ、隣にJ大学本部と医学部の建物がありました。ちょうどその前を私が通りかかった時に、白衣を着た若い先生に声をかけられました。そのS先生との出会いで、九州にいた私は、なぜか東京に惹かれ、昆虫が好きだったので昆虫学を学べる農学部に入りました。

農学部生

しかし、学部2年の頃から昆虫採集だけではどうも物足りなく感じ始めました。ちょうどその時S先生から、「医学部では昆虫が媒介する病気を研究する学問があるよ」と聞かされました。私は、「これだ!」と直感して、蚊の研究を卒業論文のテーマに選びました。大学の研究室のO先生に相談したら、「医学的な研究は困るが、ミツバチが生産する王乳の生物活性試験の昆虫として蚊を使うのであればよろしい」という許可を得ました。

これが、きっかけで、蚊の研究を一人で始めました。蚊は吸血すると卵ができるというのが当時の考えでした。でも王乳を与えると蚊は成熟卵を作りました。王乳の栄養的効果が証明されて、卒業後に私の初めての論文ができました。

研究生

卒業後、私は父の勧めで、北九州で勤めるつもりにしていました。しかし、大学卒業式の日、東京に上京した母から、「O先生が、もう少し、研究生活をさせてあげてはと話されたが、どうする?」と言われました。実は、北九州に帰る決心をする前に、昔の昆虫採集のことを思い出して、昆虫の分類学を大学院で学んで、中学・高校の教員として教壇に立ちながら、昆虫の分類を行おうと密かに思っていました。当時の母校には大学院はまだ設置されていませんでしたので、他校大学院を受験しましたが、すべて門前払いでした。

このような状況でしたので、父には申し訳なかったですが、「では、1年間だけ東京で遊ばせて」と母に返事しました。

次は、受け入れてくれるところを探すことを始めました。そして当時、母校の先輩でWHO(世界保健機関)に勤務しておられたK先生の紹介で、T大学の研究所に研究生として、勉強できることになりました。この研究室には、いろんな分野の蒼々たる諸先輩、そして同輩がいて、実質8ヶ月程しかいませんでしたが、充実した研究生活でした。この研究室の大親分のS先生から後に学位をもらうことになろうとは知るよしもなかったわけです。

大学助手

まだ、4ヶ月しかたないある日、K先生から私立のT大学助手として来ないかと誘われました。行き場のない私には願ったりかなったりでした。私立T大学医学部の建物は建設中でしたので、主任教授となるO先生のいる九州のN大学に見學員として約1年間過ごしました。そしてO先生のもとで蚊とフィラリア症の研究をすることになりました。研究の基礎を学んでいない私には大変にきついしかもつらい日々でした。でも、私の研究に対する基礎はO先生とともに過ごしたこの時期に作られたと今でも思っています。

牛島先生

その後は、東京の私立T大学で研究生活を続けることになるのですが、医学部で博士号をとることは当時かなり難しく、医学部卒以外では昇級も、ほとんど無理な状況になり始めていました。当時4名いた助手も、年がたつに従って、2名はやめる事になりました。研究を続けることの難しさをふと垣間見た瞬間でもありました。私立T大学の研究室の人事は、私が研究生であった時のS先生が推薦された人がほぼ採用されていたことを後で知りました。そして、1年間だけS先生は、私たちの研究室の主任教授になられました。また学位を得るきっかけをS先生が作ってくださいました。また、この頃、医学生時代にS先生の講義を受講

された小児科の牛島先生が、コナダニの大量飼育についてS先生を訪ねてられました。それが、私と牛島先生との初めての出会いでした。

研究生活

蚊とウイルスの研究でウイルスを材料にするために、国立Y研究所でウイルス学の勉強をしました。研究所のO先生からウイルスの取り扱い方の手ほどきを受けました。これが元になって、学位論文が完成しました。

私が学位取得直後に、牛島先生から米国留学の話がありました。当時分子ウイルス学の分野では、ウイルスの塩基配列が始まった初期の頃で、現在のような試薬キットもなかったのも、手の器用な日本人が求められていた時代でもありました。分子ウイルス学を全く習ったこともなかった私は、一大決心をして、家族と一緒に渡米しました。2年間の最初の数ヶ月は、英語も、専門用語もわからなかったのも、ゲッソリとやせました。しかし、米国で給与をもらっていたのも、良い成果を上げるために、黙々と少しずつ方法を自分で変えながら研究を続けました。ある日、なにか違う実験結果が得られました。この偶然の改良が新しい方法の開発につながってから、研究はとんとん拍子に進みました。米国での指導者B先生は、毎日30分おきに実験室にこられました。実験室にこられない日は、出張または論文を書いていることを後で知りました。2年で終わる予定の仕事を1年と4ヶ月程で終わることができたのも、B先生と当時のポストクの仲間がいたからだと思います。

帰国後、2年間は私立T大学で研究を行いましたが、今度は、アフリカのケニアにある国際機関で原虫のワクチン開発の仕事にJICA専門家として誘われました。米国でのポストク時代と同じように、アフリカでも全く未知の分野での研究を2年間行いました。なぜか、このアフリカでも、私を待っていたかのように、極めて優秀な分子寄生虫学者と出会いました。最初の1年間は、日本政府に働きかけて実験室の整備を行うことでした。日本のJICA(当時は、国際協力事業団)国際機関派遣担当部署から、単独で派遣されていたので、予算も少なく、まして、実験室の整備に資金を追加してくれることはないと思っていました。だめもとで、しかし内容は極めてまじめに申請しましたところ、認

められて、実験室を整備することができました。その後1年間は、ワクチン開発の元となる原虫の遺伝子研究に没頭しました。原虫の分子生物学を基礎から教えてくれたケニアのM博士には大変に感謝しています。帰国後、縁があって、九州の私立K大学で原虫を研究することになりました。私立T大学で学位論文となった蚊のウイルス感受性に関する研究材料は、現職で再開されるまでの15年間は封印していたことになりました。

9年ほど私立K大学で研究をしておりましたが、再度縁ありまして、現在は、大分大学医学部感染予防医学講座で、寄生虫学の講義をする傍らで、蚊が媒介するウイルス病の研究を、流行地と実験室で行っています。

NPO 国際健康開発

日本で研究を行っている限りにおいて、どの地を訪問しても、言葉の壁もありませんし、文化に対して違和感を持つことはありません。しかし、海外で調査・研究をすることになると簡単ではありません。私は、フィリピンから始まり、ハワイ、米国本土、プエルトリコ、ケニア、イギリス、エクアドル、パラグアイ、タイ、インドネシア、海南島を仕事で、短期・長期に訪問しました。その中で、うまく文化になじめたり、人とのふれあいが良く得られたりした国では、研究がうまくいったように思います。

海外での生活では、長・単期にかかわらず多くの現地の人々に助けられました。このように、海外で良い経験をしたからこそ、良い研究もできるのだと今でも思っています。さて、そろそろお返しを考える年齢に私もなりました。海外で助けてくれた方々にお返しをといっても簡単ではありません。身近な外国の方たちに、ほんの少しのお返しができないだろうかとも思っています。たとえば、今の職場でも外国からきた留学生がいますと、気軽に声をかけてあげるようにしています。そうこうしているときに、牛島先生から、NPOを立ち上げたいので協力してほしいとの話を受けました。もちろん、すぐに返事をしました。これが、私のNPO国際健康開発に参加のきっかけです。

このNPO国際健康開発は、海外から日本に勉強にこられる方の支援のみならず、途上国で医療活動にたずさわの方々のために、安価な感染症検査診断キットの

開発・提供をも視野に活動しています。この NPO 国際健康開発のサポートを受けた途上国の方々は、いずれ担当分野で責任のある立場につく事でしょう。おそらく、15 年あるいは 20 年後となるでしょうが、その時を楽しみにしつつ、この NPO 国際健康開発の活動のお世話をさせていただき、また、皆様方からの末永いご支援とご指導をいただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

江下優樹

Yeshita@med.oita-u.ac.jp

大分大学医学部感染予防医学講座

スリランカでのウイルス性胃腸炎研究

日本はもとより、全世界の子供を苦しめる感染症の研究をしたいと牛島先生の研究室の門を叩いて早や 4 年、博士論文をまとめる段になりました。

スリランカ人の夫の出身大学小児科に、彼の地でのウイルス性胃腸炎分子疫学研究におけるカウンターパートを快諾していただき、大学院一年目に研究を開始することができました。一緒にディスカッションして決定したプロトコルを遵守しつつ、レジデントの若い医師たちが実際の検体・臨床情報収集を行ってくれ、頼もしく感じると同時に、研究結果を還元する責任の重さを日本で感じながら、実験・データ解析をしていきました。

2008 年 6 月には当会の助成をいただき、スリランカ小児科学会にて研究発表を行う機会を持つことができました。私の研究テーマとしているノロウイルスは、今までスリランカでの報告がなかったのですが、当地での子供達に重い疾病負担を強いている現状の報告は、多数の学会参加者に関心をもって受けとめられたようでした。学会後の病院訪問では、東京大学より以前寄贈された胃腸炎ウイルスの迅速診断キットが話題になり、必要な器具や手順が少ないため、臨床現場での使い勝手がよいとの印象をお話だけしました。

この学会は 2007 年 12 月に生まれた長男を連れての参加で、渡航の準備から滞在まで緊張の連続でもありました。そんな中、離乳食が始まったばかりだった息子は、スリランカのモンキーバナナの甘さが気に入ったようで、ニコニコ食べてみせて家族一同を喜ばせてくれました。「今度会うときは、そこら中を駆け回っ

ているのでしょね」とスリランカの共同研究者に言われたことを、一昨日頃より急に一人歩きするようになった息子を見ながら、懐かしく思い出しています。

臨床、研究、育児、全てが自分にとって大切なものであり、バランス感覚をしっかりと保ちつつ、歩みは遅くとも前進していければと考えております。皆様からご指導・ご鞭撻いただければ、幸いです。

高梨さやか

東京大学大学院医学系研究科

生殖・発達・加齢医学専攻小児科学博士課程

After I returned to Vietnam

After finish 5 years studying in The University of Tokyo (2 years for Master Course, and next 3 years for Doctor Course), I went back to my fatherland Vietnam and continue my previous job in the Department of Pediatrics, University of Medicine and Pharmacy at Ho Chi Minh City.

In Ho Chi Minh City, medical schools do not have attached university hospital, therefore, medical students have to come to governmental hospitals for clinical practice. I work in the Department of Gastroenterology, Children's Hospital No.1 as physician and tutor for 6-year medical students and also graduated students. Working as a tutor, I have chance to express to students my knowledge that I have collected when I studied in the Department of Departmental Medical Sciences, The University of Tokyo, under the supervision of Professor Hiroshi Ushijima.

I start my daily work at 7AM in the hospital by a brief meeting of all staff of the department. Then I visit patients in 2 inpatients rooms that I am in charge. Medical students also accompany me and discuss with me bed-side. Since 9:30AM, we gather in a lecture room for case presentation. Many kinds of diseases such as acute gastroenteritis, acute pancreatitis, hepatitis, Wilson's disease, etc. were discussed.

In the afternoon, I stay in the hospital for day duty (if I am in charge for that day), or give a lecture in

the university. I usually give lectures about pediatric gastroenterology and nephrology. Students could be 4-year or 6-year medical students, or nurses. I also teach in the SKILLAB in the university, in which I teach for 4-year students how to conduct some skills such as lumbar puncture or how to ask a medical history from patient.

In the evening, I stay at home with my family including my wife and a 3 year old daughter. I work in the outpatient ward of the Children's Hospital No.1 there times per week, from 4PM to 8PM. This is kind of extra-time service, because the number of patients come to visit this hospital increase day by day. Estimatly, there are more than 5,000 patients come to the outpatient ward every day, so we have to open some examining room at extra-time. I also have night duty twice a month in the Department of Gastroenterology.

Together with those activities, I also be a member of some associations and to attend scientific meetings which are held every 2 months. The topics of these meeting include many aspects in pediatrics such as infectious diseases, neonatology, respiratory diseases, cardiology, etc. I had a chance to have a presentation in the scientific meeting of the Ho Chi Minh City Association of Pediatric in March, 2006, and my topic was "Molecular epidemiology of diarrheal viruses in Ho Chi Minh City and immunochromatography test for rapid detection of rotavirus". I am now the secretary and councilor of the Ho Chi Minh City Association of Pediatric, and also be the councilor of the Vietnam Association of Pediatric. I was in the Organizing Committee of the 19th Vietnam Congress of Pediatric which was help on 27 and 28 of December, 2008, and Professor Hiroshi Ushijima was one of special invited speakers in that Congress.

Thanks to 5 years studying in Japan, I have lot of new knowledge about diarrheal viruses in children, and more important, I have learned the method how to study and how to conduct a research. I love my job now, by which, I have a chance to make a

continuous study and to share what I have learned to medical students.

Ho Chi Minh City, January 7th, 2009

Nguyen Anh Tuan, M.D. Ph.D.

Former graduate student of the Department of Developmental Medical Sciences, The University of Tokyo, Tokyo, Japan

My Study in Lao PDR and Japan

I was born and obtained my medical doctor degree in Vientiane, the capital of Lao People's Democratic Republic (Lao PDR). After getting 2 years of working experiences involving public health, I found that maternal and child health still remain chronic public health problem in Lao PDR. For example, respiratory infection disease, malaria, dengue fever, diarrhea, malnutrition and other childhood infectious diseases, particularly those who live in rural area. That encouraged my interesting to medical research and would like to explore children health implications. However, my research knowledge was very poor. Thus, I decided to apply for a scholarship studying in Japan, the leader of Asian countries, to learn more medical research methods and international health. Fortunately, my dream became true when I was selected as one of grantees.

I got to come to Japan in April 2003, enrolled as master course candidate for health sciences at Department of Developmental Medical Sciences, Graduate School of Medicine, The University of Tokyo. I started my first research study on malnutrition in children under 5 year of age in Luangprabang province, Lao PDR. The results of my study indicated that malnutrition was still prevalence in children under 5. The study identified socioeconomic-demographic factors, low maternal education, poor nutrition knowledge for mother, and feeding practice for sick children are affecting children health status. I sent the feedback to concerned health authorities for considering

policy adaptation.

I decided to continue my doctor course with a research title of rubella and measles epidemiology in Lao PDR. As we know, rubella is a mild childhood disease, however if pregnant women get rubella infection in the first 3 months, the virus can transmit to embryo, resulting of rubella congenital syndrome (CRS). Recently, rubella and measles are suggested to be eliminating worldwide, but there is no previous study on rubella have done in Lao PDR and rubella vaccine is not included in national immunization program. Therefore, I conducted a serosurvey of rubella and measles antibodies in school aged children in Vientiane, Lao PDR. The study results indicated that more than half of school children had not presented rubella antibody, suggesting they are still susceptible to rubella virus. It is recommended that rubella vaccine should be introduced as soon as possible for prevention CRS.

In my future plan, I am going to study more about seroprevalence of rubella antibody in pregnancy, investigation rubella infection and CRS cases, and study on wild rubella virus genotyping that circulate in Lao PDR by collaboration with Japan. I also plan to have a connection with neighbor

countries to study on circulating of wild rubella in South East Asian countries.

Finally, I would like to express my sincere gratitude to Japan for financial supports and providing unlimited health sciences knowledge. My special thanks to the International Health Development (IHD) for some part of financial contribution to my study. My hope, I wish to contribute my obtained skill into my country health development especially improving child health status.

Phengxay Manilay

Department of Developmental Medical Sciences, Institute of International Health, Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

編集後記

第2号として大分大学医学部感染予防医学講座の江下優樹先生、東京大学医学系研究科大学院生の高梨さやか様、Manilay Phengxay 様、元大学院生の Nguyen Anh Tuan 先生に寄稿していただきました。江下優樹先生には次回にご本人の海外での研究活動について書いていただく予定です。大学院生には海外渡航、海外での研究にNPO国際健康開発から支援いたしました。平成20年度があつという間に終わろうとしております。実りある皆様の生活と健康を願っております。(牛島廣治記)



平成 20 年 3 月 25 日

NPO 設立総会にて